

大学教員体験記(上)

～大学生の実態と教員のお仕事～

茂田インテリジェンス研究室主宰 茂田 忠良

I はじめに

小生は警察OBであるが、本年3月まで大学教員を勤めていた。そこで日本の大学社会の実態を見聞したが、その体験は新鮮であり日本社会について新たな知見を得た。

ところで、本学会員の過半数は教育界の外の方々なので、昔の大学生体験はあっても現在の大学の実態は御存知ないと思う。また、教育界の方々も、他大学の実情については余り御存知ないかも知れない。勿論、小生の経験は某中堅大学の特定学部には過ぎないが、体験記を披露して、教育と言う日本社会の枢要部分についての理解の一助にして頂ければ幸いである。勿論、拙文は我が国の大学の全体像を示すものでもなく、小生の理解不足もあるので、諸氏の御批判を仰ぎたい。

なお、学生アンケート調査によれば、所属学部は各学部の中でも高い満足度と評価を得ていた。また、教職員の方々も熱心に教育研究に取り組まれていた。我が国では、相当マトモな学部と評価してよいと思う。

今回のニュースレターでは、大学生の実態とこれに対する教員の仕事について、次回(下)は、学部運営の実態と文部行政の課題について、記述する。

II 大学生の実態

大学生の実態を一言で言うと、新井紀子・国立情報学研究所教授の言葉に集約できる。即ち「大学の主な問題は、学生が大学教育を受けられる状態で入ってきていないこと」(2016年3月30日「日経新聞」)である。学生の大多数は、大学生に必要な基礎学力と向学心が不足している。

勿論、基礎学力と向上心を共に備えた学生もいる。小生のゼミ生の中にも、学生時代の小生よりも幅広く読書をして広い見識を身につけた学生もいた。しかし、残念ながら、このような大学生らしい学生は1割位であり、大多数は基礎学力に欠け向学心も不十分である。

1 基礎学力の欠如

基礎学力を、基礎知識と文章読解力・文章作成力の二点から見てみよう。

- (1) 先ず基礎知識だが、学生の殆どは歴史や地理、社会の基礎知識が極めて不十分である。

小生はインテリジェンス論を講義していたが、現代インテリジェンスを理解するには、世界の近現代史の骨格、世界地理の基礎位は知っている必要がある。しかし、例えば東條英機が日米開戦時

の首相と言い得た学生は100人中1人位しかいない。また、中近東、アフリカ、中南米諸国の名前もよく知らない。

講義を理解するために必須の基礎知識が欠落している。

(2) 次に、文章読解力が弱体である。

小生は読書に力点を置いた読書ゼミを行っていた。課題本の中には絵本や高校生向けの文章もあったが、それでも難しいという反応であった。訊いてみると、大多数の学生は教科書以外の本を殆ど読んだことがない。読書が好きだと言うので読書体験を聞くと、コミックやライトノベルが出てくる。因みに、教科書はメルカリで中古本を買い、授業が終わるとメルカリで売り払うことが多い。従って、教科書に線を引いたり書き込んだりはしない。

最近の学生は新聞や本を読まないと言われる。確かに、私が確認した範囲でも、新聞を読む学生は殆どいない。総合雑誌も読まない、というよりは本屋も覗かないので総合雑誌の存在を知らない。新書も文庫も読まない。読めるのに読まないのではなく、読むのが苦痛なので読まないのである。

貧弱な読解力の背景には、読書習慣の不在と共に、語彙の不足や基礎知識の不足がある。

(3) 文章作成力も弱体である。

小生の読書ゼミでは頻繁に感想レポートの提出を求めたが、最初から論理的な文章を書ける学生は多くはない。文章もマトモに書けない学生も多数いた。題名や学生名の記載のないレポート、1文章1段落で改行が全くないレポート、或いは、読点は一切ない文章もよく提出を受けた。誤字も多数あった。語彙が少ないので変換ミスに気が付かずに放置してしまう。更に、放っておくと自己の思いを書き連ねただけの自由作文になる傾向があり、論理明晰な文章からは程遠いものになる。

大学生になっても、論理的文章の「型」を習得していないのである。

2 向学心の欠如

そもそも何のために大学に入るのか。「大学で勉強したいから」ではないのである。

国立教育政策研究所の2014年調査によれば、予習復習など授業関連の学習時間は、1～3年生では週平均5時間程度である（社会科学系では更に少なく、8割の学生が5時間以下）。アルバイトが週9時間以上、サークル・部活の時間が週4時間以上、娯楽交友が週10時間以上である。つまり、学生生活とは、授業を除けば、アルバイトで稼いだ金でサークルや娯楽交友を楽しむのが基本である。これは小生が接した学生像と一致する。殆どの学生がアルバイトをしており、授業以外の第1優先事項はアルバイトであり、時には授業にも優先する。授業外では必要最低限の学習しかしない。

何のために大学に入ったのか、学生に訊くと、「それが普通だから」「就職に不可欠だから」という回答が多い。確かに首都圏の4年制大学進学率は約6割なので、大学進学が普通ではある。

大学生活の目標は何か。「大学生活は人生の夏休み」との回答が返ってくる。「人生の春学期」でしっかり勉強してきていればまだ良いのだが、それが大いに疑問なのである。

3 精神的・社会的成熟度の低さ

大学で接した学生の気質についても触れておこう。

- (1) 先ず、学生のナイーブさ、幼稚さが目立つ。

人間の偉大さと卑小さ。世界や人間社会には、光もあれば闇もある、善意もあれば悪意もある。全ての国の歴史には光と影がある。こういう人間社会の複雑性を理解していない学生が多い。

小生の講義やゼミでは、人間社会の複雑性を理解させるように努めており、多くの学生は理解を深める。しかし、最後まで「戦争は悪。平和は善。命は大切。」（ピリオッド）で思考停止の学生がいる。奴隷の平和でも良いのか。米国における黒人の地位向上に果たした戦争（南北戦争、WW I、WW II、冷戦）の役割をどう評価するのか。植民地からの独立戦争も悪なのか。こういう問いについて考えることを忌避する。浅薄な人間理解と幼稚な歴史観と言わざるを得ない。

- (2) 大多数の学生は発言力が弱い。授業で自らの意見を述べることに消極的であり、特に対立的な意見を述べることに極端に消極的である。対立を嫌う。

小生のゼミでは、発言と討論を推奨しているが、殆どの学生は他者の意見に対して対立的な意見を述べようとしめない。意見の違いを前提に議論を闘わそうとしめない。現実世界では、人々の立場と利害は対立し、対立を前提に議論しなければならないが、対立自体を忌避しようとする。

基礎ゼミの評価アンケートを取ると、ゼミのお蔭で意見を積極的に発表できるようになったと感想を述べる者がいる。ところが、当該者の実際の発言頻度は積極には程遠いものだった。自己評価と客観評価の隔たりが大きい。自己主張をするためのストレス耐性もなく、対立的な自己主張もできない若者を見ていると、我が国の将来はどうなるのかと不安になる。

- (3) ひ弱でありながら、自意識が強く自己チューで駄々っ子の様な学生もいる。本音を言うと、こういう学生は一番対応に困る。厳しく指導するとどういった反応があるか分からない。小中高校と過保護で扱われストレス耐性が極めて低いのであろう。小生が大学生であった半世紀前には見なかったタイプである。それとも昔からこういう学生はいたのに、小生が気が付かなかっただけであろうか。

4 基礎学力・向学心欠如の背景

ここで述べた大学生が生まれる背景を考えると幾つかの要因が考えられる。

- (1) 先ず大学進学率の増大が指摘できる。4年制大学への進学率は、1970年17%、1990年24%、2020年54%と近年激増している。量の変化に伴い、質の変化が生じるのは必然である。
- (2) より大きな要因は、マトモな受験勉強を経験していない学生の増加である。金子元久・筑波大学特任教授によれば、「実質的に学力試験を受けずに大学に入学する学生は約半数に達する。」その結果、高校生の家庭学習の時間が大幅に減少している（2021年7月20日「日経新聞」）。

大学生の4分の3は私立大学生であるが、私大は経営の安定を図るために系列高校を増やしてきた。系列高校の学生は（学部選抜の内部試験はあっても）受験勉強が不要なので、一般試験選抜の学生と比べて学力が低いのは常識である。その他のA0入試や推薦入試なども、貧弱な大学スタッフ態勢から判断して、どれだけ正しく学力を判定できているか、疑問がある。

また一般試験選抜も、私立大学では受験科目3科目以下が殆どであるから、私立専願であれば、高校では3科目以下しか学ぶ必要がない。

和田秀樹氏はかつて『受験勉強は子どもを救う』という本を著して、受験勉強が基礎学力向上に果たす機能を指摘したが、現在の大学生の多くは、大学入学のために幅広い基礎学力を身に付けるインセンティブを失っている。

- (3) 初等中等教育「改革」の失敗も挙げられる。和田秀樹氏によれば、1980年代まで日本の中学生・高校生の学力は世界トップレベルであったそうである。しかし、文部科学省による数十年来の相継ぐ「改革」で、初等中等教育の現場は疲弊して、教育力はむしろ低下しているのではないか。

また、高校からすれば私立専願を推進した方が大学合格実績が向上し易いので、(公立高校も)私立専願用シラバス構成となっている例が多々ある。2年生になると受験科目の選択と重点化に入るので、数学・国語・英語・理科・歴史地理社会の基礎知識を幅広く身に付けることなど、全く考慮外となる。

Ⅲ 教員のお仕事

中堅大学の学生の実態は、上述したように基礎学力と向学心を備えた大学生らしい大学生がいる一方で、この何れか或いは両方が不足する学生が多数存在する。その結果、時々、大学生と高校生と中学生と一緒に教えているのではないのかという思いに捉われたときもあった。小生の経験を中心に、教員のお仕事の実態を述べる。

1 講義科目の授業

大学生らしい大学生に対しては、大学らしい授業をする必要がある。他方、基礎知識に欠ける学生はそれでは十分理解できないので、講義の中に歴史や地理の基礎知識も盛り込む必要がある。

2 演習科目の授業

基礎ゼミでは、論理的な文章を書けるようにするため、最初にモデル感想文を配付して論理的文章の手本「型」を提示した上でレポートを添削返却する作業を反復した。真面目な学生はこれを数回繰り返すと、論理的で理解し易い文章が書けるようになってくる。他方、何回添削しても向上しない学生もいる。そういう学生は実は返却したレポートを見ていない。1時間以上掛けた添削(出来の悪い文章ほど添削に時間が掛かる)を見ていないと知った時の徒労感は相当なものである。

3 コピペ問題

因みに、コピペ・レポートの蔓延は教員の悩みの種である。小生はコピペは大幅減点するので絶対厳禁と警告していたが、それでもコピペをする。令和3年度の基礎ゼミでも、学生の2割が1回以上コピペ・レポートを提出した。これはコピペチェックサイトなどを利用して出典を突き止めた数であり、出典は突き止められなかったが、内容から判断してウェブ上の解説や書評を下敷きにして書いたと思われるレポートは更に多い。殆どの学生はコピペに罪悪感をもっていない。

他の教員に尋ねても困っているようで、仕方がないと諦めている教員、逆にコピペ・レポートは認めたくないのにレポート自体を課さないこととしている教員など様々であった。

コピー・レポート蔓延の背景には、コピーに甘い我が国の学校の体質と論理的作文教育の欠如がある。前者は、小保方氏の博士号（早稲田大学）取消の経緯を見ても明白である。論文中に他者の文章を無断使用すれば、即座に論文として認めないという当り前の評価基準が確立されていない。後者については、我が国では論理的な文章を書く訓練が小学校以来大学まで不十分である。

小生は米国大学のサマースクールで「文章作成」授業に感銘を受けた経験がある。文章全体の構成方法、段落配置の仕方、トピックセンテンスや主題の記述の仕方、接続詞の使い方など、論理的な文章を書くための各種技法が網羅されており、実に勉強になった。我が国では、作文技法の教育は不十分なまま、作文や自由研究が推奨されている。コピー・レポートが蔓延するのは必然であろう。

一時、某親王殿下のレポートにコピーが含まれていたと週刊誌が大騒ぎをしたが、我が国の学校でのコピー蔓延状態を理解してのことであつたらうか。

4 ゼミ生に対する就活・受験指導

どの教員も取り組んでいる実質的な仕事が、ゼミ生に対する就活指導である。小生は、希望に応じて民間企業エントリーシートの添削もしていた。中には10社以上の添削を一度に依頼してくる学生もいた。また、警察官や消防士受験者には、小論文答案の添削や面接指導をしていた。

更に所属キャンパスでは金山泰介教授の発案で、自分のゼミ生か否かにかかわらず、警察官の面接試験の指導をするようになり、かなり成果を上げたのではないかと思う。これに倣って、消防士、自治体職員、国家公務員の面接指導もキャンパスとして取り組むようになった。

5 各種委員会

大学には学部運営のための委員会が20以上もあつた。学務、学生生活、就職、企画広報、入試、FD（Faculty Development）、研究、図書、個人情報等々である。各教員は、一つ以上の委員会に属するので、人によっては相当な負担となる。

教員の仕事には、この他にもやる気のない学生の指導、クレーマー対策も考える必要がある。その他ここには書ききれない諸々の仕事がある。それに当然のことながら研究もしなければならない。

本当に中堅大学の教員は大変である。多様な学生（基礎学力と向学心が十分でない者が多数）を対象に多様な業務（教育、研究、管理業務）をこなさなければならないのである。そして、我が国の将来は、人材育成、つまりこのような教員の奮闘に掛かっているのである。教員の皆さんの奮闘を心から祈るばかりである。

（以下次号）